

Koichi Sugiyama
すぎやまこういち



© 堀田力丸

1931年4月11日、東京都生まれ。作曲家。高等学校在学中より作品を書き始める。東京大学を卒業後、文化放送を経てフジテレビに入社し、ディレクターとして『おとなの漫画』『ザ・ヒットパレード』『新春かくし芸大会』などの番組を手がけ、同時に作曲家としての活動を始めた。《亜麻色の髪の乙女》《花の首飾り》《恋のフーガ》《学生街の喫茶店》など多くのヒット曲、CM、アニメ、映画音楽、器楽曲、東京・中山競馬場の発走ファンファーレ、マーチなど幅広いジャンルの音楽を手がけている。人気ゲームソフト『ドラゴンクエスト』シリーズの音楽を発売以来担当。青少年のオーケストラ入門になればと、オーケストラによる交響組曲『ドラゴンクエスト』のコンサートを各地で実施。2018年、旭日小綬章を受章。2020年に文化功労者に選出される。2021年9月30日に逝去。従四位および旭日中綬章が追贈された。

創立60周年記念

都響スペシャル「すぎやまこういちの交響宇宙」

TMSO Special "60th Anniversary"

"Symphonic Cosmos of Koichi Sugiyama"

TMSO

東京芸術劇場

2025年10月19日(日) 15:00開演

Sun. 19 October 2025, 15:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 大野和士 Kazushi ONO, Conductor

ヴァイオリン ● 矢部達哉 Tatsuya YABE, Violin *

合唱 ● 新国立劇場合唱団 New National Theatre Chorus, Chorus **

合唱指揮 ● 富平恭平 Kyohei TOMIHIRA, Chorus Master **

コンサートマスター ● 山本友重 Tomoshige YAMAMOTO, Concertmaster

すぎやまこういち：カンタータ・オルビス ** (6分)

Koichi Sugiyama: Cantata Orbis **

すぎやまこういち：ヴァイオリンのための小協奏曲

《日本の風》* (8分)

Koichi Sugiyama: Violin Concertino "The Japanese Wind" *

すぎやまこういち：ヴァイオリンのための《神秘なる静寂》* (9分)

Koichi Sugiyama: Mysterious Silence for Violin *

休憩 / Intermission (20分)

すぎやまこういち：交響曲《イデオン》 (38分)

Koichi Sugiyama: Symphony "IDEON"

I Lento Maestoso - Andante Moderato

II Andante assai

III Allegretto Scherzando

IV Tempo di Marcia

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

協力：スギヤマ工房有限会社

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。



© Fumiaki Fujimoto

東京都交響楽団音楽監督、ブリュッセル・フィルハーモニック音楽監督、新国立劇場オペラ芸術監督。

1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者(現・桂冠指揮者)、カールスルーエ・バーデン州立劇場音楽総監督、モネ劇場(ベルギー王立歌劇場)音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者、バルセロナ交響楽団音楽監督を歴任。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。2017年、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

これまでにボストン響、ロンドン響、ロンドン・フィル、ゲヴァントハウス管、フランクフルト放送響(hr響)、パリ管、スイス・ロマン管、イスラエル・フィルなどを指揮。ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに登場している。

2019、21年に自ら発案した国際プロジェクトで『トゥーランドット』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』を指揮。新国立劇場では、西村朗『紫苑物語』、藤倉大『アルマゲドンの夢』、渋谷慶一郎『スーパーエンジェル』、細川俊夫『ナターシャ』を世界初演、また『ワルキューレ』『カルメン』『ペレアスとメリザンド』『ボリス・ゴドゥノフ』『ラ・ボエーム』『シモン・ボッカネグラ』『トリスタンとイゾルデ』『ウィリアム・テル』と話題作を手掛けた。今年11月に『ヴォツェック』(都響がピットに入る)を指揮する。

2026年4月より都響芸術顧問を務め、2028年4月に都響桂冠指揮者に就任予定。

矢部達哉 (ヴァイオリン)

都響ソロ・コンサートマスター

Tatsuya YABE, Violin
TMSO Solo-Concertmaster



© T. Tairadate

洗練された美しい音色と深い音楽性によって、日本の楽壇のリーダーとして最も活躍しているヴァイオリニストの1人。

江藤俊哉に師事。1989年桐朋学園大学ディプロマコース修了後、1990年に22歳の若さで東京都交響楽団のソロ・コンサートマスターに抜擢された。サイトウ・キネン・オーケストラでオペラや交響曲のコンサートマスターを務めるほか、トリトン晴れた海のオーケストラのコンサートマスターおよび京都アルティ弦楽四重奏団のメンバーとして定期演奏会を行っている。1997年、NHK連続テレビ小説『あぐり』のヴァイオリン・ソロで大きな反響を呼ぶ。2003年にはNHKテレビ放送50年記念ドラマ『川、いつか海へ』の音楽(作曲／岩代太郎)を演奏。

オーケストラのかたわら、ソロ、室内楽で活躍。ソリストとして、朝比奈隆、小澤征爾、若杉弘、ジャン・フルネ、ジェイムズ・デプリースト、エリアフ・インバル、ガリー・ベルティーニ、アラン・ギルバートらの指揮者と共演。

『音楽の友』2009年4月号では、読者の選んだ「私の好きな国内オーケストラのコンサートマスター」で1位に選ばれ、『文藝春秋』2016年2月号で「日本を元気にする逸材125人」の1人に選ばれている。1994年度第5回出光音楽賞、平成8年度村松賞、1996年第1回ホテルオークラ音楽賞を受賞。

ソリストとして、ソニー・クラシカルより横山幸雄とのデュオ2枚を含む5枚、オクタヴィア・レコードより2枚(モーツァルトのヴァイオリン協奏曲第4番&第5番《トルコ風》／横山幸雄とのデュオでベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第9番《クロイツェル》&第10番)の他、フォンテックより朝比奈隆指揮 新日本フィルとの『ブラームス：ヴァイオリン協奏曲』、またキングレコードよりトリトン晴れた海のオーケストラの『ベートーヴェン：交響曲第9番「合唱付」』のCDが発売されている。

毎年開催されている三島せせらぎ音楽祭のアンサンブル・メンバー代表。

新国立劇場合唱団 New National Theatre Chorus, Chorus



ラター：マニフィカト（2024年9月15日／東京芸術劇場／大野和土指揮 新国立劇場合唱団 他）
© サラダ音楽祭実行委員会

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として1997年10月に開場。1998年4月から、新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始した。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有し、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は高い評価を得ている。都響をはじめ、国内主要オーケストラのほか、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ベルリン・フィル、クリーヴランド管など海外オーケストラとの共演も果たしている。第31回ミュージック・ペンクラブ音楽賞「クラシック／室内楽・合唱部門賞」を受賞。

東京藝術大学卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之の各氏に師事。これまでに群響、東京シティ・フィル、東京フィル、東響などを指揮。オペラでは新国立劇場、東京二期会、藤原歌劇団などの公演で副指揮者、合唱指揮者などを務めている。2019年4月から新国立劇場合唱指揮者。



富平恭平
Kyoei TOMIHIRA,
Chorus Master
(合唱指揮)

「すぎやまこういちの交響宇宙」—— 曲目について

国塩哲紀(東京都交響楽団 芸術主幹)

カンタータ・オルビス

1980～81年に初放映されたテレビアニメ『伝説巨神イデオン』は、富野由悠季(当時の表記は富野喜幸)監督の前作である『機動戦士ガンダム』同様、視聴率低迷などの要因により、当初の予定より4話短く終了せざるを得なかった。それをなんとか完結させたいというスタッフの執念により制作された劇場版(1982年)は、テレビシリーズ放映分の総集編としての『THE IDEON 接触篇』と、その結末が描かれる『THE IDEON 発動篇』の2部から成り、合計の上映時間184分(85分+99分)という巨編となった。その『発動篇』のラストシーンで流れるのが《カンタータ・オルビス》である。

未知の意志集合体にして無限のエネルギー「イデ」をめぐる地球人と異星人の遭遇と誤解、そして争いの果てに、イデの発動とともに1人残らず死に至った登場人物たちが、肉体から解放されて宇宙を飛翔する壮大かつ幻想的な場面のために、富野は、すぎやまこういちに、カール・オルフの世俗カンタータ《カルミナ・ブラーナ》のような曲をとリクエストし、すぎやまは即座にその意図を理解し、了解したという。すぎやま自身この曲について次のように語っている。

『イデオン』のテーマは、輪廻という言葉に代表されるように、やや仏教的なものじゃないかと考え、クライマックスのラストシーンでは大々的な生命賛歌をつくりました。「生命賛歌のためのカンタータ、オルビス」というのです。——徳間書店『ロマンアルバム・エクストラ51 伝説巨神イデオン』(1982年刊)より

Cantataは、17世紀イタリア発祥の器楽伴奏つき独唱曲から発展し、今日では広く合唱と管弦楽による作品の一形式を指す。内容は宗教的なものから、祝典的、抒情的、叙事的なものなど多種多様である。

Orbisとはラテン語で、円環、循環、天体、あるいは眼などを意味するが、この曲においては、すぎやまが語っているように、輪廻転生の意味を込めていると考えられる。

《カンタータ・オルビス》は混声合唱と2管編成の管弦楽のために書かれ、ラテン語のテキストもすぎやま自身による。交響曲《イデオン》の第2楽章にも用いられている「イデのテーマ」が、ここでも主要動機として合唱の冒頭から現れる(4音動機「A-G-C-A」が移調され「E-D-G-E」となっている)。イ短調から出発した音楽は、転調を繰り返しながら目くるめく発展。終結部で主要動機が再現されると、回帰したイ短調の主和音を放射し終わりを迎える。

作曲年代：『THE IDEON 発動篇』制作時期と考えられるため、1981～82年

初 演：曲が収録された『THE IDEON 発動篇』は1982年7月10日公開

演奏会初演／2025年10月19日 東京芸術劇場(本演奏会)

大野和士指揮 東京都交響楽団 新国立劇場合唱団

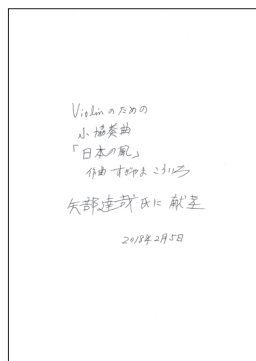
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン4、
大太鼓、シンバル、ゴング、ハープ、弦楽5部、混声合唱(最大で7声部に分割される)

ヴァイオリンのための小協奏曲《日本の風》

ヴァイオリンのための《神秘なる静寂》

この2曲は、いずれも都響ソロ・コンサートマスターでもあるヴァイオリニスト、矢部達哉へのギフトとして書かれた。そのいきさつについてはP. 16～17の矢部達哉へのインタビュー記事を参照されたい。

《日本の風》のスコア表紙にはすぎやまの自筆で、矢部への献辞、曲名とともに2018年2月5日の日付がある。2月5日は矢部の誕生日であることから、彼へのバースデープレゼントとして作曲したであろうことは想像に難くない。曲は、ヴァイオリン独奏と2管編成の管弦楽のために書かれており、Andantino～カデンツァ～Vivace～Andantinoという構成。全体に5音階的な動きが多いため明確な調性感よりは旋法的な響きが特徴で、実際メロディは都節音階風あるいは律音階風でもあり、また、時折雅楽のような和音の合いの手が入るなど、それらがタイトルの由来でもあるだろう。なお、この年すぎやまは、秋の叙勲で旭日小綬章を受章している。



《日本の風》スコア表紙に記された、矢部達哉への献辞

《神秘なる静寂》は『「ドラゴンクエストⅧ」空と海と大地と呪われし姫君』の「神秘なる塔」を原曲とし、ヴァイオリン独奏と弦楽合奏のために書かれた。ヴァイオリンセクションのピッツィカートに導かれて、独奏ヴァイオリンが美しい旋律を奏でる(Lento assai)。その主題がVivace～Allegro moderatoの部分で展開され、さらにカデンツァが続き、主題が再現されて終わるというシンプルな構成だが、それを支える和音の、特にいわゆるテンションコードあるいはポリコードを駆使した、時に予想外とも言える進行が生み出す文字通り神秘的な響きがなんとも美しい。すぎやまこういちの非凡かつ洗練された和声の魅力にあふれた名曲と言えるだろう。

ヴァイオリンのための小協奏曲《日本の風》

作曲年代：献辞の日付は「2018年2月5日」

初 演：2025年10月19日 東京芸術劇場(本演奏会)

矢部達哉独奏 大野和士指揮 東京都交響楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

ヴァイオリンのための《神秘なる静寂》

作曲年代：不明(2018年前後)

初 演：2025年10月19日 東京芸術劇場(本演奏会)
矢部達哉独奏 大野和土指揮 東京都交響楽団

楽器編成：弦楽5部、独奏ヴァイオリン

交響曲《イデオン》

フジテレビ勤務時代、ディレクターとしてのみならず作曲編曲も手がけ、数々のヒット番組やヒット曲を生み出し、天才と呼ばれたすぎやまこういちは、独立後、劇場版『科学忍者隊ガッチャマン』（1978年）やテレビアニメ『サイボーグ009』（第2期：1979～80年）の音楽を担当し、^{しかい}斯界においてオーケストラを使いこなせる作曲家／編曲家としての評価を不動のものとした。そんなすぎやまに、『伝説巨神イデオン』のスタッフが音楽を依頼したのは、振り返ってみれば歴史的必然だったと言えるだろう。

富野由悠季監督から『イデオン』の構想を聞いたすぎやまは、その世界観を表現するためにオーケストラを使うことを提案した。すぎやまは次のように述懐している。

『イデオン』を手がけるにあたって富野演説を聞いたのですが、哲学的でむずかしい話でした。舞台は広大な宇宙だけれども、描きたいのは人間なのだと。富野さんの口から流れてくることばを聞くうちに、なぜ人間は存在しなければいけないのかわかったようなわからないような。でもそれで『イデオン』のイメージは自分なりにつかんだつもりです。（中略）『イデオン』は、線香花火のようにぱっと当たってその場限り、ではなく5年後、10年後再上映されても鑑賞に堪える作品だと思います。それに合わせる音楽も古くならないものでなければならぬ。そうすると必然的にロックよりも息の長いシンフォニックな曲調の方がいい。宇宙的広がりやスケールの大きさを出すにもシンフォニーはぴったりですよ。——徳間書店『ロマンアルバム・エクストラ48 伝説巨神イデオン』（1982年刊）より

かくしてすぎやまは、『イデオン』の音楽素材を用いて、単なる「組曲」ではなく「交響曲」を書くことを決意する。それは、今日の青少年たちが日常的に最も接する機会の多い純粋なオーケストラサウンドはアニメ映画などを通じてであり、したがってオーケストラの機能をフルに活かした『イデオン』の音楽こそそれにふさわしい、というすぎやまの理念と確信からの決断だった。そして、既発表の《オーディオ交響曲》第1番(1976年)、第2番(1977年)に続く、3作目の交響曲として書き上げられた「交響曲《イデオン》」は、厳選されたテーマ群による全4楽章、演奏時間40分近い大作となった。オーケストラは2管編成。電子楽器やドラムセットは用いられない。

キャッチーかつ深みのあるメロディ、さまざまなジャンルの音楽から抽出したエキスのような独特の和声、この交響曲の録音にも参加した名トランペッター数原晋^{かずはらしん}を想定したと思われるジャズ風ソロやハイノート（最高音はF）など、すぎやまの良い意味でボーダーレスな音楽語法が惜しみなく投入されている。一方で、クラシック音楽に詳しいリスナーなら、この交響曲に、ブラームスやプロコフィエ夫らの影響を聴きとることは容易だろう。しかしそれは、独学の作曲家が、偉大な先達の書法を消化し、自らの音楽スタイルとの融合を追求し続けた驚くべき成果であり、したがって、そのような指摘はむしろ、オーケストラを駆使して“クラシック音楽”を書くことに情熱を注いだすぎやまこういちにとって本望ではないだろうか。

第1楽章 レント・マエストーソ～アンダンテ・モデラート

冒頭に鳴り響く凜然たるファンファーレ主題（Lento Maestoso）と、次いで弦楽器により奏される流麗な主題（Andante Moderato）による自由なソナタ形式で、交響曲全体への導入的性格を持つ楽章であると同時に、序奏とコーダを持つ演奏会用序曲の佇まいでもある。この2つの主題は、いずれもアニメのエンディングテーマソング《コスモスに君と》から生まれている。前者は主題歌の後半（サビ）部分からの発展、そして後者は主題歌の前半部分そのままである。2つの主題のコントラストは鮮やかで、さらに、展開の途中でさりげなく原曲主題歌のイントロが現れ、アニメを知るファンの心をくすぐるなど、随所にすぎやまこういちの巧さが光っている。

第2楽章 アンダンテ・アッサイ

4音（A-G-C-A）から成る「イデのテーマ」を主題としたミステリアスな楽章。このモティーフが、安らぎや恐怖、あるいは怒りや哀しみを表現するかのごとくさまざま変容していく。中間部に置かれた、ジャズのテイストをまとった2本のトランペットによる長いカデンツァ風のモノローグが、あたかも宇宙空間を漂うかのような浮遊感を醸す。

第3楽章 アレグレット・スケルツァンド

プロコフィエフを彷彿させる軽快なスケルツォ。劇中では主に子どもたちの陽気でユーモラスな場面に用いられた音楽が中心となっている。

第4楽章 テンポ・ディ・マルチア

主題と変奏。ブラームスの交響曲第4番第4楽章をモデル——ブラームスが用いたシャコンヌあるいはパッサカリアではないものの——としていることが窺える。

〈主題〉ト短調 Tempo di Marcia（行進曲のテンポで） 4分の4拍子。チェロが16小節の主題を演奏する。これは、サウンドトラックでは「闇からの手」と題さ

れた、異星人の存在を暗示するテーマである。

〈第1変奏〉Grandioso 管打楽器の力強い合いの手を伴いながら、弦楽器がわずかに変形された主題を演奏する。ホルンの勇壮なオブリガートが印象的。

〈第2変奏〉ロ短調 Andante Moderato フルートとオーボエのユニゾンにより奏される主題は、結尾部でフルート二重奏による装飾が施される。

〈第3変奏〉ハ長調 Andante 弦楽合奏による優しく、古風な味わいの変奏。

〈第4変奏〉変イ長調 Andante moderato 金管楽器が主題を受け渡していき、明るく盛り上がりと思いきや、次の変奏に向けて急激に表情を曇らせる。

〈第5変奏〉ここから第10変奏までは、ブラームスの影響が特に色濃いセクションである。ハ短調、4分の3拍子となり、愁いを帯びた弦楽合奏が一気にムードを変える。

〈第6変奏〉ホルンが決然と主題を引き継ぎ、木管楽器と弦楽器が対話を交わしていく。

〈第7変奏〉Andantino フルート、オーボエ、ヴァイオリンソロによる室内楽的な変奏。

〈第8変奏〉Grave 金管楽器によるコラル風変奏。

〈第9変奏〉ホ短調 Allegro moderato スケルツォ風変奏。トロンボーンの短いコラルや、弦楽器と木管楽器に現れる3連符が切迫感を演出。

〈第10変奏〉切なくも美しい弦楽合奏がホルンのコラルしょうりんとともに昂まると、その熱を鎮めるかのように、落ち着いたトーンに収斂していく。フェルマータをはさんで、ト短調でAllegroの導入が猛然と立ち上がり、態勢を整え、Maestosoの〈第11変奏〉に突入する。これは第1変奏と同じ音楽であり、事実上の主題回帰と言える。4小節のドラムマーチを経て、〈第12変奏〉でトランペットが主題を完全に再現し、うなりを上げる弦楽器の3連符、管打楽器の鋭い打ち込みとともに、クライマックスを築く。そしてAllegroの〈第13変奏〉はそのままコーダとなり、主題は大きく変容し、最後はオーケストラのすべての楽器が、全宇宙に叫ぶかのように、ト長調の壮大なエンディングに向かって上昇していく。

作曲年代：1981年頃

初 演：曲を収録したレコード(30cmLP)は1981年10月21日発売

小松一彦指揮 東京フィルハーモニー交響楽団

演奏会初演／2025年10月19日 東京芸術劇場(本演奏会)

大野和士指揮 東京都交響楽団

楽器編成：フルート2 (第2はピッコロ持替)、オーボエ2 (第2はイングリッシュホルン持替)、クラリネット2(第2はバスクラリネット持替)、ファゴット2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、小太鼓、シンバル、大太鼓、ヴィブラフォン、ゴング、グロッケンシュピール、ウッドブロック、カステネット、シロフォン、トライアングル、ハープ、弦楽5部

あとがき

『伝説巨神イデオン』が初放映された時(1980～81年)、筆者は高校3年生でした。『無敵超人ザンボット3』(1977～78年)、『無敵鋼人ダイターン3』(1978～79年)、『機動戦士ガンダム』(1979～80年)とリアルタイムで観続けてきた者にとって、富野由悠季監督の次なる作品やいかにと期待大。しかし、アメコミ風のキャラクター造形や形而上学的なテーマに加え、悲劇的だったザンボット3以上に救いのない物語展開に凡庸なる高校生は愕然とするばかり。その上唐突な終了、と言うより打ち切り……(その挫折感は後に劇場版で解消されるわけですが)。それでも、爽快な主題歌や、雄渾な劇中曲、アカペラのアイキャッチなど、すぎやまこういち氏による活力に満ちた音楽は強く印象に残りました。

それから三十数年。都響の現場ですぎやまこういち氏にお目にかかったのを機に聴き直した交響曲《イデオン》(小松一彦指揮 東京フィルハーモニー交響楽団)に改めて瞠目。サウンドトラックの単純な再構成などではなく、魅力的な主題が生き生きと展開されていく有機的な手法は、実にシンフォニック。もはやアニメのための音楽を超えて、純粋に鑑賞に堪える音楽であり、オーケストラのコンサートにプログラムできる(すべき)交響曲ではないだろうか。やはりクラシック音楽たらんと生み出された『ドラゴンクエスト』の音楽が、多くのオーケストラによって繰り返し演奏され、新たな価値を生み出しているように。

今回、交響曲《イデオン》と《カンタータ・オルビス》、そして矢部達哉氏のために書かれたヴァイオリン協奏曲を組み合わせた演奏会を企画したのは、都響からのすぎやまこういち氏への感謝とともに、それらが優れたコンサートピースでもあることをライブで紹介するためです。「交響宇宙 Symphonic Cosmos」というタイトルは、もちろん『イデオン』へのオマージュでもあります。むしろそこから離れ、この交響作品展が、すぎやまこういち氏の音楽が持つ普遍的な魅力の再発見、再確認となれば幸いです。

末筆ながら、このコンサートのために楽譜の整備・提供をはじめ多大なご協力を賜りましたスギヤマ工房様に厚く御礼申し上げます。

参考資料：

交響曲《イデオン》CD(KING / KICA2169)木村重雄氏によるライナーノーツ
オリジナルサウンドトラック『伝説巨神イデオン』CD(KING / KICA2167)《復活のイデオン》
作曲ノート SKD(H)2018
『ロマンアルバム・エクストラ48 伝説巨神イデオン』(徳間書店 1982年刊)
『ロマンアルバム・エクストラ51 伝説巨神イデオン 接触篇／発動篇』(徳間書店 1982年刊)
『THE MUSIC OF IDEON ～ 伝説巨神イデオンの音楽世界』(劇伴倶楽部 2010.11増刊)
NHK『この道わが旅～すぎやまこういち音楽の旅路～』(2021年12月11日放映)

Special Thanks to: 矢部達哉 中村大志 佐野秀典 藤田純二 山崎哲彰(腹巻猫)



©T. Tairadate

都響ソロ・コンサートマスター

矢部達哉 *Tatsuya YABE*

すぎやま先生の思い出

すぎやまこういち氏と長きにわたって共演を果たし、『神秘なる静寂』『日本の風』を献呈され、10月19日にソリストとして初演を行う矢部達哉。思い出を伺いました。

◆ 神秘なる静寂

『ドラゴンクエスト』には素晴らしい曲がたくさんありますが、僕は中でも『ドラゴンクエストⅧ』の《神秘なる塔》が好きで。打楽器の短い前奏があって、オーボエがメロディを歌い始めます。いつも感動しながら演奏していました。自分の葬式でエンドレスで流してほしい曲を選ぶとしたら、これだなと。

すぎやま先生とも「僕は《神秘なる塔》が好きで、自分の葬式で流したいんですよ」「ああ、そう、ありがとう」みたいな話をしていました。するとある日突然、先生のお宅にお邪魔した時に、「はい、これ」と楽譜を渡されて、「矢部さんのために《神秘なる塔》を書き直してみた」「ええ、本当ですか?」と。タイトルを《神秘なる静寂》に変えて、ヴァイオリン・ソロと弦楽合奏のために編曲してくださったんですね。

ただ、なかなか採り上げる機会がなくて。先生のお誕生日会があった時に、僕は都響のメンバーを雇って、スタジオでこの曲をレコーディングして、プライベート盤を1枚だけ作ったんです。それをサプライズでお誕生日会で流したら、すぎやま先生がボロボロ泣きながら「良かった、生きているうちにこれを聴けて」と言ってくださった。だから公開の場で演奏してなくて、10月19日が初演になります。

◆ 日本の風

《日本の風》も、ある日先生のお宅へ伺った時に、「はい、これ」と楽譜を渡されて。「矢部さんのためにヴァイオリン・コンチェルトを書いた」と。この時も本当に驚いて、「ありがとうございます!」と持ち帰って、ソロ・パートを弾いてみた。次に行った時に先生の前で弾いて、「こんな感じですか?」「この音はちょっと間違いだね」とかそんな話をしました。先生は「ブラームスがコンチェルトを書いた時も、ヨアヒムとこんなやりとりをしたんだろーうね。こういう会話ができて嬉しいなあ」と。この曲もなかなか演奏する機会がなくて、やはり10月19日が初演になります。

先生が晩年、よく言っていたのは「自分はもうすぐいなくなるけど、日本の子どもたちがこれからも平和に過ごせるといいな」と。平和と日本の心をすごく大事にしていられから、心の中でメロディが生まれる時は、和風の響きになったのかもしれませんが。『ドラゴンクエスト』にも雅楽みたいな部分があります。ずっと続いてきた日本の伝統や文化はなくなってしまうのは、そんな思いを随所に感じますね。

《日本の風》と《神秘なる静寂》は、曲の長さも楽器編成も異なりますけれど、構成的には姉妹作です。2曲ともゆっくりとしたテンポで始まり、速い部分があり、カデンツァがあり、ゆっ

くりとした部分に回帰して終わる。作曲されたのも2~3年くらいしか離れていないはずです。

僕が委嘱したわけでも、先生から「矢部さんのために書くよ」と言われたわけでもなく、ある日突然「はい、これ」と渡された。演奏されることを想定せず、趣味のように気が向いたから書かれた。そんな2曲ですね。

◆ 指揮者として

すぎやま先生は、アドルフ・ブッシュ（ヴァイオリン／1891～1952）、ルドルフ・ゼルキン（ピアノ／1903～91）、ブルーノ・ワルター（指揮者／1876～1962）といった往年の巨匠たちの録音に、SP時代から親しんだ方です。古き良き時代の本質的なものが身体の深いところに入っていて、それが自分の作品に反映され、指揮にも表れる。

先生の、弦楽器への思いを何度か感じたことがあって、『ドラゴンクエスト』を弾いた時に、ちょっと「高級」なフィンガリング（ヴァイオリンのD線で高い音域を弾く）を使ったことがありました。すると指揮をしていた先生が「ありがたい、そこでD線を使ってくれるなんて」と。弦楽器の構造や指遣いまで、深く理解していた方でした。

すぎやま先生が指揮すると、弦楽器が本当に良い音で鳴るんです。都響が札幌へ行って、初日は『ドラゴンクエスト』、次の日がシンフォニー、という2日公演を何度かやりました。それで、初日のアンコールの時に翌日のプロモーションを先生がやってくださった。「明日はこんな曲をやります」と。ブラームスの交響曲第1番フィナーレの第1主題。それは、都響からこれほど豊かな響きを引き出した指揮者はいただろうかと思ったくらい。またある時は、同

じくブラームスの交響曲第4番冒頭。最初の「H・G」の2音は、指揮者にとって永遠の課題と言われるくらい難しいそうですが、先生の指揮は信じられないくらい素晴らしかった。

すぎやま先生の指揮は、他の誰にも似ていないんですよ。ぱっと見ると、シンプルに腕を上下させているだけ。ですが、そこには音の深さ、音色、テンポ、たくさんの情報が含まれている。指揮の技法に関して、独自のルートで頂点までたどり着いた人だと思います。

◆ 紅白の『ドラゴンクエスト』

先生は皆に対してフェアで、年下の若い人にもきちんと敬語で話す方でした。初めて会った20代の人にも「〇〇さん」って呼びかけて、絶対に呼び捨てにしなかった。だから皆に愛されたのだと思います。『ドラゴンクエスト』コンサートの最後にアンコールを弾いていると、オーケストラのメンバーが感動して先生のことを思い出しているな、という雰囲気になります。

『紅白歌合戦』に都響が出演して、『ドラゴンクエスト』を演奏したことがあります（2021年12月31日）。あれは奇跡的な演奏で、ドンカマも指揮もないのに、一瞬の乱れもなかった。僕が都響メンバーに言ったのは「先生は晩年、テンポが少しゆっくりになっていたけれど、NHKはCDの録音をもとに時間を決めているから、今から10年くらい前の先生の感じでやりましょう」だけ。皆がなるほど、みたいな感じでずっと演奏に入れた。すぎやま先生とはそのくらい深い結びつきがあったんです。

取材・文／友部衆樹

※矢部達哉のプロフィールはP. 7をご覧ください。